

読書感想文『青い風の約束』

ぼくは『青い風の約束』という小説を読みました。この本は、都会にすむ中学生のユウと、海辺の町にすむ少女ミナのふしぎな夏の出会いをえがいた物語です。最初はなんとなく手にとっただけだったけど、読みはじめたら止まらなくなりました。

ユウは、部活でも家でもうまくいかず、イライラしてばかりいました。そんなとき、夏休みに田舎のおじいちゃんの家に行くことになって、ミナと出会います。ミナは少し変わっていて、風と話せると言っていました。ぼくは最初、「そんなわけないだろ」と思ったけど、読みすすむうちに、その言葉の意味がだんだん分かってきて、心がじんとききました。

とくに心にのこったのは、ユウが海の岬で「風にまかせてみよう」と言う場面です。ぼくも時々、何かに失敗したときに、自分をせめてばかりいたけど、この言葉を読んで「少しくらい風まかせでもいいんだ」と思えるようになりました。生きるのって、けっこうむずかしいけど、風のようにゆるやかに生きてもいいんだと思いました。

読んでいて一番ドキドキしたのは、ミナが町からいなくなってしまうところです。まるで風のように、スッと消えてしまっ、ユウが泣くシーンでは、ぼくも目があつくなりました。最後にユウが「ありがとう」と言うところで、なんか胸の中がスーっとして、せいせいしたような、でも少しさびしい気持ちにもなりました。

この本を読んで、ぼくは「人との出会いは風のようにいつか終わるけど、その思い出はずっと心にのこる」ということを学びました。これからぼくも、日々の小さな出会いや出来ごとを大切にしたいと思います。

さいごに、この本を読んで本当に良かったです。今でも、ページをとじると、あの青い風の音が聞こえる気がします。